

# レーニン選集

9

マルクス＝レーニン主義研究所訳

*Ленин*  
Россійская Коммунистическая Партія (большеви́ковъ).

*Пролетаріи всѣхъ странъ, соединяйтесь!*

---

Н. Ленинъ (Вл. Ульяновъ).

**ПРОЛЕТАРСКАЯ**

**РЕВОЛЮЦІЯ**

**И РЕНЕГАТЪ КАУТСКІЙ.**

レーニン選集 第9冊 ¥ 250.

---

1958年1月31日 初版発行

1959年4月25日 2版発行

訳者 マルクス・レーニン主義研究所  
レーニン全集刊行委員会

発行所 株式会社 大月書店

東京都文京区本郷1の15

電話 (92) 3091・7887

振替 東京16387

---

三晃印刷・田中製本

## はしがき

一 この選集は、ソ同盟マルクスレーニン主義研究所編『レーニン二巻選集』をもとにし、同研究所と日本のマルクスレーニン主義研究所との意見でいくつかの論文を加除して編集したものである。

一 翻訳には現行版としてもっとも權威のある『レーニン全集』第四版を底本につかった。全集のどこに入っているかは各論文末にしめしてある。

一 原注は(1)(2)……でしめして各段落のつぎに、訳注は\*印をつけて人名注とともに巻末にかかげておいた。ただし人名注は、本文のなかではいちいち印をつけずに、一括してアイウエオ順に配列してある。なお、本文中「」内の六号または六ポイント組の挿入は訳者による補注である。

一 訳文のなかで傍点がついている箇所は原文ではイタリック体になっている。ゴシック体のところは原文では同様ゴシック体である。

一 訳出には全集刊行委員会の翻訳者団と校閲者団が責任をもってあたり、術語・用語・文体・字づかいの統一をおこなっている。



## 目次

|                                |       |    |
|--------------------------------|-------|----|
| 奇妙なことと奇怪なこと                    | ..... | 七  |
| 重大な教訓と重大な責任                    | ..... | 一五 |
| ロシア共産党（ボリシエヴィキ）第七回党大会          |       |    |
| 一九一八年三月六—八日                    |       |    |
| 戦争と講和にかんする報告 三月七日              | ..... | 二二 |
| 今日の主要な任務                       | ..... | 四五 |
| ソヴェト権力の当面の任務                   |       |    |
| ロシア・ソヴェト共和国の国際的地位と社会主義革命の基本的任務 | ..... | 五〇 |
| 現在の一般のスローガン                    | ..... | 五三 |
| ブルジョアジーとの闘争の新しい局面              | ..... | 五五 |
| 全人民的な記帳と統制のための闘争の意義            | ..... | 六三 |

労働生産性の向上.....六六

競争の組織化.....六六

「整然とした組織」と独裁.....九一

ソヴェト組織の発展.....一〇

結語.....八三

## 全ロシア中央執行委員会とモスクワ・ソヴェトの

合同会議における対外政策についての報告「抜萃」.....八五

飢えについて（ベトログラード労働者への手紙）.....八八

国民経済会議第一回大会における演説 一九一八年五月二十六日.....九六

プロレタリア革命と背教者カウツキー

序 文.....一〇八

カウツキーはどうやってマルクスを平凡な自由主義者に変えてしまったか？.....一〇九

ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義.....一一九

搾取者と被搾取者との平等はありうるか？.....一二五

ソヴェトは国家組織になつてはならない.....一二三

憲法制定議会とソヴェト共和国.....一三六

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| ソヴェト憲法                    | 一四六 |
| 国際主義とはなにか？                | 一五五 |
| 「経済的分析」をよそおったブルジョアジーへの忠勤  | 一六八 |
| 付録一 憲法制定議会にかんするテーゼ〔第八冊所収〕 |     |
| 付録二 国家にかんするヴァンデルヴェルデの新著   | 一九一 |
| 事項注                       | 一九九 |
| 人名注                       | 二〇七 |
| 解説                        | 二二三 |



## 奇妙なことと奇怪なこと

一九一八年二月二十四日に採択された決議のなかで、わが党のモスクワ州ビュロー<sup>\*</sup>は、中央委員会にたいする不信任を声明して、「オーストリア・ドイツとの講和条約の諸条項の実施をともなうような」中央委員会の決定にしたがうことを拒み、そして決議にたいする「説明書」のなかで、「ごく近い将来に党の分裂はほとんど避けられないものと思う」と述べた。

(1) つぎが決議の全文である——「ロシア社会民主労働党モスクワ州ビュローは、中央委員会の活動を審議して、中央委員会の政治方針と構成にかんがみて、中央委員会にたいする不信任を表明し、機会がありしだいその改選を主張するであらう。そのうえ、モスクワ州ビュローは、オーストリア・ドイツとの講和条約の諸条項の実施をともなうような中央委員会の決定には、どんなことがあってもしたがら義務があるものと考えない」と。この決議は全員一致で採択された。

すべてこうしたことには、すこしも奇怪なことがないだけでなく、奇妙なこともない。単独講和の問題について中央委員会と鋭く意見のちがう同志たちが、中央委員

会を非難し、そして分裂が避けられないという確信を表明することは、まったく自然のことである。こうしたことはすべて党員のまったく当然な権利であり、それはまったくわかりきったことである。

だが、奇妙で奇怪なのは、この決議に「説明書」がつけられていることなのだ。以下はその全文である。

「モスクワ州ビュローは、きわめて近い将来に党の分裂がほとんど避けられないとみ、しかも単独講和と締結論者にたいしても、また党のすべての温和な日和見分子にたいしても、おなじように闘っている徹底した革命的・共産主義的分子全部を団結させるためにつくすことを、自己の任務とする。国際革命のためには、われわれは、いまや純形式的なものとなりつつあるソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれることを目的にかなうものと考えてる。われわれは、いままでどおり、他のすべての国に社会主義革命の思想をおしひろめ、労働者独裁を断固として実行し、ロシアのブルジョア反革命を容赦なく弾圧することを、われわれの基本的な任務と考えている」と。

奇妙かつ奇怪なのは、ここでわれわれが傍点をつけた言葉である。

この言葉に核心があるのだ。

これらの言葉が、決議起草者たちの方針全体を背理に

しているのである。これらの言葉は、彼らのあやまりの根源を異常にはつきりとあばいている。

「国際革命のためには、ソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれることは目的にかなうものである」……これは奇妙なことである、なぜならば、前提と結論のあいだの連繫さえないからである。「国際革命のためには、ソヴェト権力の軍事的敗北をうけいれることが目的にかなっている」——こういうテーゼなら正しいかそれともまちがいか、そのどちらかであろうが、奇妙だとよぶことはできないであろう。これが第一である。

第二は、ソヴェト権力が、「いまや純形式的なものとなりつつある」ということである。これにいたっては、もはや奇妙であるだけでなく、まったく奇怪である。起草者たちがひどい混乱に身うごきもならずまきこまれたことはあきらかである。それをときほごさなければならぬ。

第一の問題について、起草者たちの考えは、あきらかに国際革命のためには、ソヴェト権力の喪失になるような、つまり、ロシアにおけるブルジョアジーの勝利をもたらしうような、敗戦の可能性をうけいれることが目的にかなっているということになる。このような考えをのべることによって、起草者たちは、私がテーゼ（一九一八

年一月八日付、一九一八年二月二十四日付『ブラウダ』紙に掲載）【全集、第二六巻、四〇一—四〇八ページ】のなかでのべたことの正しさを、間接に認めているのである。つまり、ドイツがわれわれに示した講和条件をうけいれないならば、ロシアを敗北とソヴェト権力の打倒にみちびくであろう、ということである。

ところで、*la raison finit toujours par avoir raison*——真理はつねに勝利する！ 私の「極端な」反対者、すなわち、分裂するぞといっておどかしているモスクワの連中は、——公然と分裂のことまで述べてしまったために——自分の具体的な考えをすっかり述べてしまい、革命戦争についての一般的な空文句ですませている人たちがいわない方がいいと思っていることまでも、すっかり述べざるをえなくなったのだ。私のテーゼと私の論拠の主要点は（一九一八年一月七日付の私のテーゼを入念に読もうとする人ならばだれでもわかるように）、革命戦争の真剣な準備を同時に行いながら（またその真剣な準備のためにこそ）、いますぐに、このうえなく苦しい講和をうけいれることが必要だということを指示するにあった。革命戦争についての一般的な空文句だけでやめておこうとする人々は、私の論拠の眼目を避けるか、それとも気づかないか、または気づきたがらなかった。そ

れだから、私はいま、私の論拠の眼目について「沈黙を守るという共謀」を破ってくれたことにたいして、ほかでもなく私の「極端な」反対者たち、モスクワの連中に心から感謝しなければならない。モスクワの連中が、最初に、これにこたえたのである。

ところで、彼らのこたえは、どういうものであったか？

こたえは、私の具体的な論拠の正しさをみとめたことであつた。つまり、モスクワの連中は、いまわれわれがドイツ人との戦闘に應ずるならば、われわれは実際に敗北に直面する、ということのみとめたのであつた。<sup>(1)</sup> そうだ、この敗北は実際にソヴェト権力の没落をもたらすだろう。

(1) 戦闘を回避することは、どちらにしてもできなかったのではない。いかという反論にたいしては、私のテーゼは一月八日に読まれており、一月十五日ごろには講和することができたのだという事実がこたえてゐる。もしも、もしも……革命的な密文がくさなかつたなら、きつと息抜きは確保されていただろう（しかもわれわれにとっては、ほんの短い息抜きでも、非常な——物質的な精神的な——意義をもっていたのである。なぜなら、ドイツ人は新しい戦争を宣言するにちがひなかつたからである）。

私の「極端な」反対者たち、モスクワの連中が、私の論拠の眼目に、つまり、われわれが即座に戦争に應じる場合の戦争の条件にかんする私の具体的な指摘にたいし

て、「沈黙を守るという共謀」を破ったことにたいし、また、彼らが私の具体的な指摘の正しさを臆することもなく認めたことにたいし、かさねがさね心から感謝する。さらにつぎに、モスクワの連中が実際にその正しさを認めざるをえなかつた私の論拠にたいする反論は、どのようなことであるか？

それは、国際革命のためには、ソヴェト権力の喪失をうけいなければならない、ということである。

なぜ、国際革命の利益は、そのようなことを要求しているのであらうか？ 私の論拠に反論したがっている人々にとっては、ここがかなめであり、ここに彼らの論証すべき眼目がある。ところが、ほかならぬこのもつとも重要な、基本的な、根本的な点については、決議でも、また説明書でも、ただの一言もべられていないのである。決議文の起草者たちには、周知のそして議論の余地のないこと、つまり、「ロシアのブルジョア反革命を容赦なく弾圧すること（ソヴェト権力の喪失にみちびくような政策の手段と方法とによつて、か？）や、党のすべての温和な日和見主義分子にたいする闘争ということについてのべるだけの時間と場所があつたが、ほかならぬ論争のまとなつてゐることについては、講和反対者の立場のほかならぬ本質にふれることについては——一

言もいわない！

奇妙である。きわめて奇妙である。決議の起草者たちがこのことを言わずにいるのは、彼らがこの点で、自分らがとりわけ興味があると感じているからではないのか？ なぜかをはっきりいうこと（国際革命の利益はそれを要求している）はおそらく、自分の正体を暴露することになるであらう……。

われわれは、決議文の起草者たちが指針としたかもしれない論拠を、それがどこにあろうと、さがしださなければならぬ。

ことによると、起草者たちは、国際革命の利益は、帝国主義者との講和はなにによらず結ぶことを禁じていると考えているのであろうか？ こういう意見は、ペテルブルグのある会議で、若干の講和反対者によつてのべられたことがあるが、この意見を支持したものは、単独講和に反対したもののうちでもとるにたぬ少数数であった。この意見がプレスト会談の適当であることを否定し、ポーランド、ラトヴィアおよびクールランドの返還という条件「でも」、講和を否定することになることは、明らかである。このような見解（たとえば、ペテルブルグの講和反対者の大多数によつて否認されたような）が正しくないことは、一目瞭然である。このような見地からすれ

ば、帝国主義列強にかこまれた社会主義共和国は、どのような経済的条約をも締結することができないし、月の世界へでも飛んでいかないかぎり、存在することができない。

ことによると起草者たちは、国際革命の利益は国際革命をおし進めることを要求しており、そのようにおし進めるものは、ただ戦争だけであつて、帝国主義の「合法化」といったような印象を大衆にあたえるおそれのある講和ではけつしてない、と考えているのかもしれない。

このような「理論」は、マルクス主義とは完全に手を切ることになるであらう。マルクス主義は、革命をおし進めるということをつねに否定してきた。革命は、革命を生みだす階級的矛盾の鋭さが成熟するにつれて発展するものである。こういう理論は、武装蜂起がいつでも、またいかなる条件のもとでも、かならずとらなければならぬ闘争形態であるという見解と、同じものだろう。実際には、国際革命の利益が、国内のブルジョアジーを打倒したソヴェト権力にこの革命を援助するように、しかしその援助の形態はその力に応じて選ぶように要求しているのである。あたえられた国における社会主義革命の敗北の可能性をうけいれることによって、国際的規模でこの革命を援助するということ——そんな見解は、おし

進めの理論からさえもでてこないのである。

ことによると、決議の起草者たちは、ドイツの革命はすではじまつており、そこでは革命はすでに公然とした全国的な内乱に達しており、だからわれわれは、ドイツの労働者を援助するために自分の力をつくさなければならず、またすでに決戦を開始して危地におちいつているドイツ革命を救うために、われわれ自身は破滅しなければならぬ（「ソヴェト権力の喪失」）、とても考えているのであろうか？ この見地からすれば、われわれが滅亡することによって、ドイツ反革命の勢力の一部を牽制し、そうすることで、ドイツ革命を救おうというのであろう。

このような前提のもとでは、ソヴェト権力の敗北の可能性も喪失の可能性もうけいれることが、「目的にかなう」（決議文の起草者たちがいうように）ばかりでなく、まったく義務的でもあることが、十分に考えられる。だが、こういう前提が現存しないことはあきらかである。ドイツ革命は成熟しつつあるけれども、革命はまだドイツで爆発するまでになつておらず、ドイツにおける内乱とまでなっていないことはたしかである。われわれが、「ソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれる」ならば、あきらかにドイツ革命の成熟を援助しないで、かえつて

妨げることになる。そのことによってわれわれは、ドイツの反動を援助し、ドイツの反動に有利なように行動し、ドイツの社会主義運動を困難なものにして、一八七一年のコンミュニョンの壊滅がイギリスの労働者をおじけさせたように、まだ社会主義に移っていないドイツのプロレタリアと半プロレタリアの広範な大衆を、ソヴェト・ロシアの壊滅によっておじけさせ、彼らを社会主義からとおのけてしまうことになるであらう。

なんにしても、起草者の議論には、論理はみられない。「国際革命の利益のためには、ソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれることが目的にかなうものである」ということをささえる、道理にかなった論拠はないのである。

「ソヴェト権力はいまや純形式的なものとなりつつある」——これは、われわれがみたように、モスクワ決議の起草者たちが語るにいたった奇怪な規定である。

もしもドイツ帝国主義者たちがわれわれから買物を取りたてるとすれば、もしも彼らがドイツに反対するわれわれの宣伝と煽動を禁止するならば、そのときには、ソヴェト権力も意義をうしない、「純形式的なものとなる」ではないか、というのが、おそらくは、決議文の起草者たちの「思考」の筋道なのであろう。私が「おそらく」というのは、起草者たちは、このテーゼを裏づけるような、

明瞭で正確なことを、なにひとつのべていないからである。

もっとも深刻な、はてしのない悲観の気持と、このうえない絶望の感情——これが、ソヴェト権力の意義を形式的なものであるかのようにいい、ソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれる政策を認めようという「理論」の内容なのである。どのみち救いはない、だからたとえソヴェト権力であろうとほろびるがいい——こういうのが、奇怪な決議をさせている感情である。このような考えは、ときとしていかにも「経済的」な論拠をまもっているが、それも帰するところは、おなじはてしのない悲観論である。すなわち、しかじかの貢物、もう一度貢物、または貢物と、奴らがとりあげることができるというのに、一体なにがソヴェト権力だ、というのである。

どのみち滅びるのだ、という絶望にはかならない。

この感情は、ロシアがおかれているきわめて困難な状態のもとでは、理解できる。が、しかしそれは、自覚した革命家のあいだでは「理解できる」ことではない。この感情は、モスクワの連中の見解を背理にしたものとして、まさに特徴的である。一七九三年のフランス人は、彼らの闘いをつた共和制と民主主義が純形式的なものになったとも、また共和制の喪失の可能性をうけいれなけ

ればならないとも、けっしていわなかったであろう。彼らは絶望ではなく、勝利の信念にみちていた。革命戦争をよびかけながら、しかも同時に、公式の決議で、「ソヴェト権力の喪失の可能性をうけいれる」とのべることは、自分をくまなく暴露することを意味する。

ナポレオン戦争<sup>\*</sup>当時の十九世紀はじめのロシアとその他いくたの国は、敗戦、侵略、侮辱、侵略者の抑圧のために、一九一八年のロシアとは比較にならないほど、はかりしれないほど、多くの困難と重荷をしょいこまされた。しかし、ロシアのすぐれた人々は、今日われわれがふみにじられているよりも百倍もひどく、ナポレオンの軍靴が彼らをふみにじったときにも、絶望しなかったし、自国の政治制度に「純形式的な」意義しかないとはいわなかった。ロシアのすぐれた人々は、あきらめもしなかったし、「どのみち滅びるのだ」などという感情にもまけなかった。彼らは、ブレスト講和にくらべると、はかりしれないほど苦しい、残酷な、屈辱的な、抑圧的な講和条約に調印し、しかるのち、時節を待っただけの力があり、侵略者のくびきをしっかりとたえしのび、ふたたび闘い、ふたたび侵略者の圧制下におちいり、ふたたび酷悪な、破廉恥きわまる講和条約に調印したが、さらにふたたび起ちあがり、結局、解放されたのであつた<sup>\*\*</sup>。

(より強力な、競争しあう侵略者間の反目を利用しないではなかった)。

なぜ、このようなことがわれわれの歴史でくりかえされてはならないのか？

なぜ、われわれは絶望におちいり、決議文を——なんたることか、もつとも恥すべき講和よりも、さらに恥すべき決議文を——「純形式的なものになりつつあるソヴェト権力」という決議文を、書かなければならないのであろうか？

近代帝国主義の巨人とたたかってこのうえなくひどい軍事的敗北をなめたことが、なぜロシアにおいても、人民の性格をきたえ、自制心をたかめ、自慢と大言壮語をなくしてしまい、忍耐をおしえることができないのか、ナポレオンにおしつぶされたプロシア人の正しい戦術を、すなわち、軍隊がないときには、もつとも恥すべき講和条約にも調印せよ、全力をだし、そのうえで幾度も幾度も起ちあがれという戦術を、なぜ大衆にとらせることができないのか？

他の国民がより苦しい不幸をもしかりとたえることができたのに、なぜ、われわれは前代未聞の苛酷なものだからとただ一回の講和条約で、絶望におちいらないければならないのか？

力がないときは服従しなければならないことを知っており、しかもその後、それにもかかわらず、どんなことがあろうとも、いかなる条件のもとでも力をたくわえ、再三、再四、起ちあがることのできるプロレタリアート——このプロレタリアの堅忍不拔が、こんな絶望戦術にふさわしいものだろうか？ それともわが国の左翼エス・エルの党に代表されていて、革命戦争の空文句ではレコードを破った小ブルジョアの無気力さがそれにふさわしいものであろうか？

親愛なモスクワ派の「極端な」同志諸君！ そうではないのだ。試練の一日一日は、まさにもつとも自覚したもつとも堅忍な労働者を君たちからひきはなすであらう。彼らは言うであらう、侵略者がブスコフにいて、われわれから穀物や鉱石や貨幣で一〇〇億の貢物をとりたてるときはもちろんのこと、敵がニージヌイやロストフ・ナ・ドヌーにあらわれて、われわれから二〇〇億の貢物をとりたてるときでも、ソヴェト権力は純形式的なものになつてはいないし、またならないであらう、と。

どのような外国の侵略も、人民の政治制度をけつして「純形式的なもの」にしえないであらう(ところで、ソヴェト権力は、政治制度であるだけでなく、歴史上かつて存在したどんなものよりも数倍も高度な制度である)。

反対に、外国の侵略は、もしも、……もしも、ソヴェト権力が冒險をおかさなければ、ソヴェト権力にたいする人民の共鳴をつよめるだけであらう。

軍隊がないかぎり、いかに破廉恥な講和だからといって調印を拒むことは冒險であり、また人民は、そのような拒否をおこなった権力の冒險を非難する権利があるであらう。

ブレスト講和よりもはかりしれないほど苛酷で屈辱的な講和に調印するということは、歴史上しばしばあったのである（その例は上に述べた）、——しかもそのことは、権力の威信を失わせなかったし、権力を形式的なものにしなかったし、権力をも、人民をも滅ぼさないで、かえって人民をきたえ、侵略者の靴にふみにじられている絶望的な難局のもとでさえ、有力な軍隊を準備するための苦しい困難な、科学を人民に教えたのであった。

ロシアは、新たな、そして真の祖国戦争へ、ソヴェト権力を維持し強めるための戦争へ進んでいくだろう。そしてこれからの時代は——ナポレオン戦争の時代がそうであったように——侵略者たちによってソヴェト・ロシアにおしつけられるもろもろの解放戦争（一つの戦争ではなくて、もろもろの戦争）の時代となるかもしれない。それはありそうなことである。

それだから、軍隊がないためにおしつけられるあらゆる困難な、異常に困難な講和よりも、——どんなに恥ずべき講和よりも——さらにいつそう恥ずべきものは恥ずべき絶望である。もしもわれわれが蜂起と戦争とに真剣な態度をとるならば、われわれは異常に困難な講和を——○回結んでも、ほろびることはないであらう。われわれが絶望と空文句とによってみずからをほろぼすことがないならば、侵略者によってほろぼされることはないであらう。

一九一八年二月二十八日および三月  
一日付『ブラウダ』第三七、三八号  
署名——エヌ・レーニン  
『ブラウダ』のテキストにより印刷  
全集第四版、第二七巻、四六—五三ページ

## 重大な教訓と重大な責任

昨日、自分自身の新聞『コンムニスト』\*（マルクス以前の時代のコンムニストとつくくわえるべきであろう）を発行したわがへば左翼は、歴史の教訓を、そのものもろの教訓を回避し、自分の責任を回避しようとしている。回避しようとしても無駄である。彼らは回避しとげることはできないだろう。

回避しようとしている連中は太い骨を折って、新聞の紙面に無数の論文を書きかさね、おのれの額に汗してつとめ、「息つぎ」の「理論」を根拠のないつまらない理論とみせるためとあれば、印刷インキ「さえ」惜しまない。

かなしいかな！ 彼らのむなしい努力は、事実をくつがえすだけの力がない。イギリスのもっともなことわざがいうように、事実は曲げることのできないものである。ドイツ軍の軍事行動が停止された三月三日午後一時から、<sup>\*</sup>私がこの文章を書いている三月五日午後七時まで、われ

われが息つぎにはいつており、われわれはこの二日間を社会主義祖国の実務的な（空文句としてではなく、事実となつてあらわれているところの）防衛のためにすでに利用しているということは、事実である。このことは、大衆にとつて日ごとに、ますます明瞭となつてくる事実である。戦闘能力のない野戦軍が大砲を投げすて、橋梁の爆破さえやりえないで潰走しているときには、祖国を防衛しその防禦力をたかめるものは、革命戦争についてのおしやべりではなくて、（軍隊がこのように潰走しているのに——しかも革命戦争論者がその軍隊の一部隊をさえ制止できなかつたのに——おしやべりをするのはまったく恥ずべきことである）、残存部隊を救いだすために秩序だつて退却することであり、そのために息つぎの一日一日を利用することであるということは事実である。事実はまだげられないものである。

わがへば「左翼」は、事実や、その教訓や、責任問題を回避しながら、最近の、まったくなまなましい、歴史的な重要性をもっている過去を読者にかくして、それとつづくにすぎさつた本質的でもない事がらを引合いにだすことによつてごまかそうとつとめている。たとえば、カ・ラデックは、自分の論文のなかで、軍隊がもちこたえるよう援助する必要があると十二月に（十二月にであ